第6回銀華文学賞佳作

戻り道

足立　剛

うすねずみ色の雲を透かして薄ら日がさしてきた。陽光はしだいに輝きをまして山の稜線を鮮やかに浮かばせた。やがて、空が高く上がって青みをくわえると、三国山にかかっていた雲が、餅をやいたように白くふくらんだ。ようやく梅雨があけたのだ。

岳志は昼飯もそこそこに、牛舎から牛を引き出して、悟一の家にまわった。

悟一も梅雨あけをまちかねていたらしい。ナツメの木に牛をつないでブラシをかけながら、岳志をみて、ニッと八重歯をみせた。

一人っ子の岳志と、幼い妹をもつ悟一とは同級で、よく気があう。

「どこにする?」

「うん、綿谷で牛を放して、チャンバラやろうな」

梅雨のあいだ『真田十勇士』に夢中だった岳志は、迷わずにこたえた。

「放しても、大丈夫やろか」

悟一は慎重だ。

「谷間やから、下手で気をつけとったら、どこにも行かへんで」

岳志は確信をもっていった。谷は巾着のようなもので、口をくくっておけばすこしも心配はない。

「そうか。ほんなら、川原で牛を洗ってからな」

条件をつけて、悟一は牛を連ねた。

村の名は、神楽と書いてシグラと読ませる。但馬、播磨、丹波を分ける三国山の、丹波側のすぐ麓にあって、よく時雨れる。シグラは時雨が語源だと、母の初美から聞いたこと

がある。霧や雪も多く、年中湿潤で、その分、草の生長が早い。
農家では副業に牛を飼い、毎年農閑期に子牛を産ませて市にだしている。
市は村から一里のS町に、常設のせり場があり、雄の子牛で一万円、雌だと四万円前後でさばけた。
大卒の初任給が三千円ちょっとだから、牛は、農耕と肥料の担い手であると同時に得がたい稼ぎ手として、大切にされた。
子どもたちも高学年になると、〝牛飼い〟を日課にした。気の合う仲間と、牛を散歩させるのである。
だが、岳志は牛が苦手だった。
祖父に手綱をかけてもらって連れ出したものの、暴走する後を泣きながら何度も追いかけたし、動かないのを無理に引っ張ろうとして、鼻であしらわれ、角で追われたこともたびたびある。
祖父は岳志に鼻輪をとらせて畑をすく。牛はぬめった鼻をしゃくり、岳志の背中をグンと押す。そのつど鼻息をあらげては、飛沫を浴びせかけた。
「牛は、人間を値踏みするんや。舐められんよう、しっかり持っとれ」
祖父に叱られる。だが、いくら叱られても、その巨体と、大きな角と、人の心を透かし見るような大きな目玉とは、どうにもなじめない。
――それも去年までのこっちゃ。お前なんか、もう怖いことあらへんで。
岳志は自分の優位を知らせるため、手綱の端で臀部を打ち据えた。
牛は鼻息をあらげ、尻尾をもち上げてかけだした。
「ドウ、ドウ」
綱を引く。牛は止まる。岳志はその従順さに気をよくして、二度三度とくり返した。
「タケちゃん。どないしたんや」
あきれ顔の悟一が追ってきた。
「うっとうしい梅雨があけたし、もうちょっとで夏休みや。そない思うたら、めっちゃ、うれしいて、じっとしておれへん。命の躍動ちゅうやっちゃ」
「イノチノヤクドウ？　タケちゃんは、むずかしいことというなあ」
「エヘヘ。悟一ちゃんも、体がおどりだすようなことないか？」
「さあなあ。そんなん、ないなあ」
「悟一ちゃんは、落ちついとるさかいな」

「ぼくかて、体を動かすの好きやで。せやけど、おかしい思うことがぎょうさんあって、つい思案してしまうんや」
「へえー。どんなこと？」
「こないだから、満で歳を数えるようになったやろ。あれ、どうにもフに落ちんのや」
「どうして」
「生まれても、誕生日まで一歳といわへんやろ。赤ちゃんがかわいそうやないか」
「そうかなあ」
「そうやで。命があるのに〇歳なんて、ゼッタイ、おかしいで」
「それやったら、小数でいうたらどうや。生まれて二月の赤ちゃんは、〇・二歳や」
「うん。ぼくもな、はじめはそう考えた。けどな、それやったら、十ヶ月の子は、〇・一〇歳になるんやで」
「あっ、ほんまや。小数はあかんなあ」
「そうやろ。ほかにもあるんや。母の日がきまったけど、お母ちゃんのない子かておるやんか。ザンコクやで」
「悟一ちゃんは、やさしいなあ」
「アジャー！　六年になって、タケちゃんに、はじめてほめてもろた」
岳志は、おどけてバンジュンをまねる悟一にあわせて笑った。
が、やさしい母初美を想い描くと、母の日はあってもよい、いや、あるほうがよい、と思った。
――だれも母親から生まれてきたんやから、生きとっても死んどっても、心の中で、お母ちゃんおおきに、というたらええんや。それを、カーネーションの色がどうとかいうからややこしいになるんや。
「それになあ。母の日があって、父の日がないのは不公平や。そうは、思わへん？」
悟一のいちばんの思惑は、どうやらそこにあるらしい。
悟一の父は、農業のかたわら機械で縄をなって忙しくしているが、穏やかなものいいをする人で、子煩悩だ。岳志は日ごろ、悟一がおっとりとやさしいのは、お父さんの性質をうけついだから、と思っている。
「父の日なあ……」
岳志は、言葉をにごして考え込む。
――いや、父の日なんかいらんで。お父ちゃんなんか、いつもむずかしい顔して、怖い

だけやんか。
　えらが張ってひげが濃く、めったに笑顔などみせたことのない父延雄の顔を思い浮かべながら、岳志はそう思うのである。

　小学校教員の延雄は、日曜日は農作業に勤しむが、平日は帰宅すると机に向かい、鉄筆で音をたてる。岳志は隣室でそれを耳にしながら眠りにつくのだが、真夜中をすぎても、その音がつづいていることが多い。
　机上はいつも整理され、乱雑をきらった。原紙のマス目をうずめた文字は、定規をあてて書かれ、活字のように整って読みやすい。何事にも用意周到で、完璧を期した。
　岳志は、そんな父が苦手で、帰宅したとたん緊張してしまう。
　ところが猫のタマは、延雄のズボンの裾がパタパタするのをよろこんで、尻尾をたててまといつく。
　甘えるすべをしらない岳志は、タマを横目でにらみながら、着かず離れずの距離をとってしまう。
　一昨年の正月、区長の祖父が役員をまねいて宴会を開いたときのことである。大男で酒癖の悪い源蔵が、隣席の人にからんだ。だれも止めようとしない。
別の部屋から延雄があらわれて、穏やかに源蔵を諌めた。怒声を上げて源蔵がつかみかかった。首の分だけ上背がある。
延雄は源蔵の胸元と袖をつかむと、上がり框まですべるように進んで、三和土に一本背負いで投げ落とした。
　一瞬の静寂のあと、同情と非難の声があがった。
「ケガのないよう手加減しとる」
延雄は、動じないでいった。
源蔵は、つかの間の茫然からさめると、血の気をなくした顔で、非を詫びた。
「さすが、師範学校で副将をつとめた男や」
宴席は、たちまち賞賛にかわった。
何事もなかったような顔で、源蔵と杯をかわす父を、岳志は恐怖と憧憬とをないまぜて、見つめた。
　入梅の霧雨が降る日曜日、岳志は延雄と草を刈っていた。
草をつかむのと鎌を引くタイミングがあうとリズムができて、岳志には楽しい作業であ

る。任された土手を、早く早くと調子をあげて刈り込んだ。
鎌がガッと音をたてた。石で滑った！　と思ったのと同時に、左食指に痛みがはしった。
第一関節の背が斜に一センチほど口をあけ、白いものが見えている。
骨？　こわごわ屈げて、ゆっくり伸ばした。このときようやく血がにじみでて、雨に流れた。どくっと疼き、噴出し、流れて疼く。
延雄は、手ぬぐいを裂いて指の付け根をしばり、切り取った小枝の小片で締め付けた。ヨモギの葉をもんで傷口に押し込み完全に止血してから、手ぬぐいで巻いた。
手荒だが、ものなれた、手際よい処置だ。
岳志は泣き顔でたえた。傷の痛みよりも、父に失敗を叱られるほうが恐ろしく、惨めである。指先に全神経を集中させ、息をつめている。
「よっしゃ、これでええ」
延雄は一言だけそういうと、いたわりも同情もなしに持ち場に引き返した。
刃物使うてケガするのはあたりまえや。経験つんだら、一人前に、ケガなしに仕事ができるようになる。これぐらい、たいしたこっちゃない。
背中がそういっているようで、岳志はようやく肩の力をぬいた。
疼く指を伸ばしたまま、残る指で草をつかむ。力が入らず、仕事ははかどらない。それでも岳志は、自分がすこし大人になったように思いはじめたのだった。

―　あのとき、だいじょうぶか、なんていたわられていたら、ぼくは多分泣いとったやろな。あまえて、仕事をなげだしとったかもしれん。
岳志は、白い指先をかざして見た。
―　お父ちゃんは、怖いだけやないな。やさしさには、人をあかんようにするもんと、元気にするもんと、二つあるみたいや。
寡黙な父の一面に気がついて、人の気持ちや心は言葉だけでは見えない、と思った。
「タケちゃん。どないしたんや。指、まだ痛いんか」
後ろから、悟一が声をかけた。
「いや、もう痛いことはない。けどなあ、傷跡は、一生残りそうなんや」
笑っていってみた。
それでわかった。やっぱり、父の日もあったらええんや。

この時季、川の水量はゆたかだ。淵では梅花藻の白い花がゆれている。

二人は、草履を腰にさしこんで、水しぶきを上げながら、小石が透けた浅瀬に牛を追い入れた。ヨモギを束ねた即席のブラシで、芳しい香りもすり込むように、肌をこすった。水を浴びせると、牛は、漆黒の肌に変身していく。

牛は浅瀬にとどまったまま、時おり鼻腔を空につきだして、咽喉をのぞかせながら、間歇的に尾を振った。

―　タマなんかより、よほど可愛いな。

そう感じる自分に、岳志はおどろいた。

―　こないだまでは、ぼくが、牛を怖いと思うたから、牛もそういうぼくを不安に思うて暴れていたんやろな。

人間も動物も、おたがいに相手を鏡にしているみたいや。おじいちゃんは、牛に舐められるな、といったが、それは間違いやないか。牛も、舐められんように角たてるだけや。

「タケちゃん、きょうは、牛がよう笑うなあ。久しぶりの川やから、うれしいんやで」

悟一が手をとめて、満足そうにいった。

「へえ！　牛も笑うん？」

「牛も生きとんやから、うれしいときは笑うで。ほれ、いま、また笑うたやろ」

「そうかなあ」

手をとめてまじまじと顔をふりあおいだ。牛は頭をさげ、川面にたれていた尻尾をピュウとふった。

「やられたあ、こいつ！」

袖で顔をぬぐった。ふと、疑問がわいた。

―　哺乳類にはなぜ尻尾があるのだろう？

「なあ、悟一ちゃん。犬も猫も、牛も、言葉で気持ちがいえへんから、尾っぽがあるのとちがうやろか？」

「えっ？　いや、牛の尻尾は、体に止まったアブを追う道具なんや」

「ほんなら、犬はどうや？」

「そやなあ。犬はうれしいときは尻尾をふるけど、悲しいときは悲しそうに泣くでなあ。尻尾だけで気持ちを伝えるわけやないで」

「いつやったか本で、ヒトは地上でくらすようになって尾骨が退化した、と読んだけど、それだけやなしに、脳が発達して言葉がふえたさかい、それで尻尾がいらんようになった

とは、考えられへんか」
「タケちゃんは、やっぱり、むずかしいことというなあ。脳の発達と尾骨の退化やなんて、ぼくには、ようわからんわ」
悟一はそういうと、牛の尻をていねいにこすりはじめた。
「えへへ。思いつきや」
── コペルニクスは、地球中心の宇宙説に反対して、地動説を唱えたんや。正しいと信じられていることで実際は間違いやった、ということは、まだまだいっぱいあるんとちがうやろか。
そういいたい気持ちをおさえて、岳志も牛を洗った。
マッチ箱が流れてきた。この上流にしか棲息しないアマゴを目的に、釣人が入り込む。マッチは黒地に白抜き文字の、洒落たデザインだ。町から来た人が捨てたのだろう。
目を戻したとき、箱は五メートルを下っていた。岳志に記憶がよみがえってくる。
「三国山から播磨灘に流れる加古川は、兵庫県一の長い川や。加古川線が開通するまでは、高瀬舟が行き来して、丹波の炭や栗、播磨の海産物などを運んでいた。川筋に、船町とか船渡の地名があるのはそのためや。本郷には、船着場の跡が残っているよ」
母の実家の山口で、伯父の武男が、十メートルもある高瀬舟と櫂を見せながら説明したのは、去年の夏休みだった。
中学校で社会科を教える武男は、踏み水車、龍吐水など、村で使われていた古い道具を集めている。書斎には墨で書かれた生漉きの古い書類がつんであった。もっとも、岳志の興味は、子どもと大人のしきりのない蔵書のなかにあったが、武男の話と書斎を楽しみに岳志は毎年お盆に泊まりに行っていたのである。
武男は、岳志を本郷にともなった。
川幅は広く、流れもゆるやかである。岳志の村から六里を下っただけで、川は堂々と村に居場所をしめていた。
堤防を降った所に、それとわかる石組が見られた。岳志は、高瀬舟の荷を積み下ろしする法被姿の男たちや、お茶をふるまう姉さんかぶりの女たち、小粋に櫂をあやつる船頭の姿などを、鮮やかに想い描いたのであった。
── あのマッチ箱は、本郷を通って、高砂まで流れて行くのやろか。それとも、どっかに引っかかってしまうんやろか。

岳志は小箱の運命を想った。

水を含んで沈んでしまうかもしれないし、糊がはがれてばらばらになってしまうかもしれない。それでもマッチの箱は、颯爽と、意思あるもののように下っていった。

―ぼくも、高砂まで行ってみたい。

ふと、そう思った。

綿谷は、三国山の小さな渓谷のひとつで両岸は崖だが、所々に草木が茂る平地があって、牛を放すには恰好の場所に思えた。

岳志が猿飛佐助、悟一が霧隠才蔵になった。どちらも真田十勇士で同士討ちだがしかたがない。樹間をぬいながら忍者ごっこに夢中になった。

日が翳った。

岳志は、梅雨のあいだの憂さをはらした爽快感で、手綱をくるくるまわしながら、牛の後に立った。臀を打とうと振り上げた手が、止まった。血の気が、引いた。

乳白色の尾骨が三十センチほど顕になって、ハエが、黒々と集(たか)っている。牛は、イバラに巻きつけた尻尾を、それと知らずに勢いよく振りきって、先っぽを抜いてしまったらしい。

―叱られる。

そう思うだけで身がすくんだ。岳志は、牛の不幸を思いやるゆとりもなく地べたに座り込んで、はげしく泣きじゃくった。

どっぷりと暮れた村の道を、今はもう慰めの言葉もない悟一が、消沈し、断続的にしゃくりあげる岳志を、振り返り振り返り連れ帰った。

その後、岳志と悟一が牛を連ねることはなかった。

夏休みが近づいた夜、小学校の講堂で、映画会があった。岳志は莫蓙席で初美と並んでいた。

黒い縁取りをした白布のスクリーンでは、三益愛子の演じる貧しい母が、事情があって幼いわが子を養女に出してしまう。やがて裕福な家の令嬢に成長した娘と再会するが、自分を恥じて身を退こうとする。

会場に、洟をすする音がひろがっていった。立ち見をする人がふえ、岳志も初美も莫蓙

から立った。割り込まれ、初美と離れてしまった。

スクリーンでは、娘がそれと気がついて母と子は抱き合った。このとき立見客の最前列で何人かが将棋倒しになり、悲鳴があがった。

岳志は、叫んだ。

「お母ちゃん！　だいじょうぶかあ？」

ひんしゅくと爆笑が、クライマックスをぶち壊しにしてしまった。

翌朝岳志が登校すると、日ごろ可愛いなと思っている斉藤怜子が寄ってきて、

「あんた。夕べ、泣くような声、出しとったやろ」

と笑った。

怜子は、男のくせに、とは口にしなかったが、岳志は、怜子の表情に隠れた言葉を読みとった。

「女を守るのは、男のつとめじゃ！」

「泣くような声出しといて、よういうわ」

怜子は、ケケケ、と笑って行ってしまった。

―　なんじゃ！　おとこおんな！　お前なんか、好きになってやらへんからな。

心で吠えた。

夏休みになった。岳志は悟一の家でときどき将棋をさした。駒は悟一が小遣いをためて買ったものだが、悟一が手づくりした盤は、座布団の上におかないと動いた。

悟一はよく考えてさし、勝っても負けても感情を出さない。岳志は考えるよりも手が早い。五番勝負で、せいぜい二勝しかできない。

「悟一ちゃんは、強いなあ」

悔しさをにじませて、岳志はいった。

「たいしたことあらへん。お寺の知水に、コテンパーにやられるで」

「へえー。悟一ちゃんが負けるてか。知水は四年やろ。腹立たへんか」

「将棋は実力やで、どういうことはないなあ。強い相手とやらな、ウデがあがらんで」

―　六年生が下級生に勝っても自慢にならんし、負けたことが人に知れたら恥ずかしいだけやんか。

将棋は友だちの付き合いでするけれど、負けるのはいやだ。わざわざ負けをいう悟一に、岳志は返す言葉がない。

― 悟一ちゃんは妹がおるさかい、年下に、やさしいんやろな。
けれども、それだけでないような気がした。
― ぼくは力がないから、相手を選んで勝ち敗けにこだわっている。力がついたら、だれとでも楽しく対戦できるはずや。
岳志は悟一のように、詰め将棋の本で実力をつけようと思った。
遊び道具を買ってほしいとねだったことのない岳志は、悟一が小遣いをもらっていることを引き合いに、自分もそうしてほしいと初美に頼んだ。
「お手伝いをするたびにもらえるように、お父ちゃんに頼んであげるわ」
気軽に引き受けてくれたが、翌日、
「お父ちゃん、あかんのやて」
すまなさそうに返してきた。
「なんで?」
「お手伝いが、お金目当てになるのは岳志のためによくない、というてんやわ」
「はあ? 意味が、ようわからん」
口をとんがらせていえるのは母だけだが、悲しそうな顔をみせられては、強くいえない。
おやつも、必要な文具も、その上ときどきは父が選んだ本まであたえられている。村には雑貨屋があって、駄菓子や面子やビー玉なども並んでいるが、ひとりで店にはいったことがない。駄賃をにぎっての買い物は恥ずかしいことであった。
― お母ちゃんは、ぼくにくれる程度のお金もないんやろか?
ふと、そう考えると、岳志は将棋の駒など、どうでもよくなってしまった。

七月の末、岳志は村外れの堤防で牛に草を食ませていた。
尾骨は黒ずんで、村中の知るところとなり、いまはもう好奇の目をむけられることはなかったが、アブを追うことのできない牛後につくことは、鬱屈の種であった。
― 牛を放さなければよかった。
その後悔は、今も消えてはいない。が、一人きりの牛飼いは、退屈すぎた。
将棋盤をかかえた知水が帰ってきた。脚付きの、子どもが使うにはもったいない代物である。
岳志に魔がさした。
「小坊さん。将棋が強いんやてなあ」

「コボンさんとは、セッソウのことか」
知水は、父親の住職と檀家をまわってお経を読む。そのため、子どもの前では自分をセッソウとよんでいる。
岳志は笑って
「ほかにだれもおらんやろ。退屈やで、相手してくれ」
下手にでた。
知水は、僧職の子ども将棋会で優勝した、と小鼻をふくらませ、
「強いか」
岳志を値踏みするように見て、いった。
「あんまり強うはない。悟一ちゃんと、まあ、チョボチョボいうとこや」
ちょこっと、はったりをかました。
「そんなら、飛車角落として、受けてしんぜよう」
知水はおうように、住職の口調でいった。
岳志はムッとしたが、青光のする頭をふりながらいそいそと将棋盤をセットする知水を見ると、気のいいヤツに思えてきた。
— もしぼくに、弟がおるとしたら、こういう小生意気なのがいいな。
悟一が知水と将棋をする、ほんとのわけが分かった気がした。
岳志は、下の藪地から堤防の上に突き出た真竹に、牛をつないだ。
— 退屈しのぎの手合わせでも、コウコクノコウハイハ、コノイッセンニアリや！
悟一とは時間の倍をかけて駒をすすめたが、あっけなく負けた。
岳志は西日を正面にうけている。それで敗けるのではないが、不利に思えた。双方が均等に横から陽をあびるように盤を置きかえ、守りをかためる作戦で盤面に集中した。が、たちまちくずされる。
「王手！」
ビシッと知水が金を打った。そのとき、川原で地鳴りがした。
— 牛？　竹がしなった？　後ずさったんや！
岳志が駆け寄るよりも早く、四肢を空であがいて牛は、喉の奥からしぼるように吠え、起き上がった。どうやら背と足の骨折は免れたらしい。
が、ぬか喜びだった。右の角がぬけている。背と臀部に白い皮質が見えている。
— アホや、あほや、ほんまに阿呆や！　重ね重ねの無調法や。こんなことしてしもて、

もう、家には戻れへん。
膝が、へなへなと、折れた。影だけが時間とともに長くのびた。
知水の姿は消えていた。
潤んだ目に夕陽をうけて佇んでいた牛は、その瞳に斜光を失うと、黒ずんだ尾骨と不揃いな角をふりながら、気抜けした岳志を、のっしのっしと牛舎に引きたてた。
勝手口の戸が重い。土間に足を踏み入れた。裸電球の光源がにじんだかと思うと、堰を切ったようにふたたび涙があふれた。
「牛が、牛がなあ……」
そういうのが精一杯で、岳志は土間にうずくまって、おいおいと泣き出した。
牛舎からかけ戻った延雄は、
「お前というやつは、どこまで阿呆じゃ！　今夜はもう、勘弁ならん！」
岳志を引きたて、一発頬を打つと、胸倉をつかんで足払いをかけた。
一瞬体が浮くと世界が斜めに傾いで土間に崩されている。引き起こされると再び天地が傾ぐ。服をつかまえられているから肩や頭部を打つことはないものの、一度目より二度目、二度目よりも三度目と、後になるほど岳志の恐怖は増幅した。
「堪えて！　悪いと思うとる！　堪えて！」
「なんぼ泣いても、すまされん！」
オロオロと傍にいた初美が、見かねて涙声で岳志をかかえこみ、許しを乞う。
「放せ！　お前が甘いから、こいつに性根が入らんのや！　のけ！」
延雄は、初美ともども、いっそう激しく叱責するのだった。
おそい晩飯。嚥下のつど咽喉がいたむ。
早々と布団に身を縮め、肩を震わせている。
暗闇のなか、父の怒りと母の悲しみ、祖父の落胆がじんじんと沁みいって、底なしの沼に沈んでいくような不安感が岳志の心に広がっている。涙は耳をつたって、枕に滴った。
初枝がそっと身を入れ、丸まった岳志を抱きしめた。生温かいものが頬に落ちた。言葉はなかった。
抱かれているのは心だ。傷ついた幼い心を癒すにはどんな言葉も無力だから、ただじっと包んでくれている。そんな母の気持ちが伝わってきて、岳志はいつしかまどろみ、ふたたび明るい朝を迎えるのだった。

盆がきた。
岳志は初美と、隣町のバス停に向かって小一里の道を歩いた。
一度、空荷の馬車とすれちがったが、人も動物も、風さえも見えない炎天下の昼下がりである。
麦藁帽子に半ズボン、少々の着替えとお土産を背負った岳志は、絽の着物に日傘の初美を振り返りながら先を急ぐ。二時間に一本のバスに乗り遅れないか、気が気でないのだ。
— お母ちゃんも、里帰りが楽しみなんやな。
装って、いそいそと足早に追ってくる母をみると、頬が緩む。
N町でバスを降りると、こんどは山口に向かって歩く。
岳志は弾んでいる。途中のポンプ小屋で、母と過ごす楽しみがある。大好きな伯父の話と書斎は、その後だ。
岳志は、勢いよく水をほとばしらせるポンプの給水口に顔をつきだし、水圧にはじかれながら咽喉をならした。鼻の奥から眉間が痛くなる。その冷たいしびれが脳天にひろがった。岳志はこめかみをおさえてしゃがみこみ、感覚がもどると、満足の笑みを浮かべて初美をふりかえった。
初美は扇子で岳志に風をおくり、ときどき自分をあおいだ。風は、伽羅の香りがした。
「お父ちゃんと、なぜ結婚したん?」
家では口にできない日ごろの疑問も、ここでなら気がねなく訊ける。
「山口のお父さんが、見合いをすすめちゃったさかいや」
かなたの生家のあたりに目をやりながら、遠い日をいつくしむように、初美はこたえた。
「ふーん。見合いって、どんなん?　どこでしたん?」
「山口の家に、お父さんがみえて、お母さんがお茶をだしたんやわ」
「へー。そうなん。お父ちゃんのこと、どう思うた?　男前やと思うた?」
「顔なんか見てへんで。女が、男の人をみるのはブシツケやと、お母さんからクギをさされとったさかいな」
「へえーっ!　顔も見やんと、お母ちゃん、なにを見とったん?」
「畳見とったんやわ」
ちょっと、恥ずかしそうにいった。
「畳?　そんなんで、結婚きめたん?」
「そうやで」

「へえー！　後悔、してえへん？」
ちらっと、怜子の顔が、浮かんで、消えた。
「お父ちゃんはまじめで、いっしょうけんめいな人やから、しあわせやわ」
まじめがいちばん、初美はほがらかに、歌うようにいった。
—　ぼくは、怜子のことを可愛いと思うとったのに、あの日、憎たらしいに感じた。お母ちゃんは写真とお茶を出しただけで結婚して、ほんまに後悔することがなかったんやろか。
たまたま加古川流域に降った雨は高砂に流れていく。ポンプ小屋から流れ出る水も、加古川に合流する。親にすすめられて結婚したお母ちゃんも、迷いもぶれもなく流れる加古川のようや。
また、怜子の顔が浮かんだ。

山口の家に着いた。笑顔と短いあいさつがあって、お茶になった。
温かなものいいの大人たちのなかに包まれているしあわせを満喫すると、岳志は、武男にことわって書斎に入った。
かねて読みたいと思っている本のなかから、吉川英治『宮本武蔵』の巻一を取りだした。

夏休みは、台風とともに去ってしまった。
その日、川は竹やぶを削ぎ、土橋を押し流し、道路を砕いた。風と雨がやんだあと、明るい日差しが戻ったが、赤茶けた濁流はごうごうと吠え、水かさをまして走りつづけた。
岳志の夏休みの収穫は、武男に借りて帰った『宮本武蔵』を読みきったことだ。
読めない漢字や理解できない言葉はいっぱいある。それでも、登場する人物の一人ひとりが、泣いたり、笑ったりしながら語りかけてきた。
武蔵も、お通も、朱実も、幼い丈太郎でさえ、一途な思いをもって生きている。彼らは、頼みとする親もいないし、武蔵にしても、もともと普通の人とかけはなれた、優れた能力を持っているわけでもない。それでも自分の信じるものにむかって、妥協しないで強く生き抜く。
—　武蔵は強い。
果し合いの場面よりも、加茂川の凍てた川原でひとり慶長十年の正月を迎える武蔵の孤独な姿に、そう思った。

加古川も武蔵も、そしてお父ちゃんも、ふだんは静かに、自分をたのみとして生きている。ぼくも、強くなりたい。

岳志は、武蔵の孤高にひかれ、二度読んだ。

淡いサファイア色の空にいわし雲が浮かんでいる。刈田では、用をすませた稲木が傾き加減に立ち、そのはるか上空を、赤とんぼが幾層にも舞っている。山郷の秋は早く、農事は室内作業に移っていた。

岳志は祖父とタテを担っていた。前庭でムシロに干した籾を、初美がタテに移しておく。それを、岳志が先棒で、裏手の納屋に運ぶのである。

岳志は祖父より背が低い。その分、岳志に荷重がかかる。タテには、およそ一石（一八〇リットル）の、生乾きの籾が入っている。子どもが腰を伸ばして担ぐには重すぎる量である。

岳志は、腰を引いて膝を曲げ気味に、両手で肩への負担をかばいながら、よたよたと祖父に押されて進んだ。

祖父はいっこうに休もうといわない。岳志は肩が痛く、両腕で持ち上げようと顎を突き上げふんばった。とたんに、石につまずいた。草履の右親指のつま先に血がにじんでいる。

タテに膝をぶつけてつんのめった祖父は、

「あほ！　何で止まるんじゃ。しっかり担わんかい！」

とののしった。

「つまづいたんや！」

「あほが！　何をやっても性根の入らんやっちゃ！」

「わざと落としたんやない！　そんなふうに、いわんでええやん！」

岳志の、はじめての口答えに、祖父は感情を高ぶらせた。

「昔から、二度あることは三度ある、というんじゃ！　嫌々やっとたら、こんどはもう取り返しが付かんことをしでかすぞ！」

「嫌々やっとんと、ちがう！　こんないわれかた、もう嫌や！」

岳志は叫ぶなり走り出た。

つま先もじんじんするが、祖父の言葉が心に突き刺さっている。

――おじいちゃんは、牛のことで、ぼくをまだ許してへん！

怒りと悲しみに駆られてやみくもに村下にかけている。

―　牛にケガさせたことも、タテを落としたことも、そうしようと思うてしたことやない。それをなんや！　ケガの心配もしてくれんと！

村外れの旅所を過ぎるころには、しだいに、悲しみの感情にかわっている。

さらに一里、Ｓ町の商店街を足早にぬけると、もう、今さら帰れへん、という思いだけで歩いている。

刈り入れのすまない田が、ふえていった。

気が張っているのだろう。渇きも空腹も感じなかった。

砂ぼこりを巻き上げて、バスが追い越して行った。稲田からイナゴの群れが舞いたった。

―　山口に行くときに、乗るバスや。

はじめて、自分が目的地もなしに歩いていることに気がついた。しかし足は、家を離れることが目的だ、といわんばかりに進んだ。

高校生の自転車の一団が声高に帰ってきた。五月から左側通行となって、人と車の対面交通に改まっていた。岳志は恥ずかしくなって、県道下のあぜ道に避難した。

「……フォークダンスちゅうやつは、照れるのう」

「よう、いうわ！　お前、越川といっしょになったら、しっかり手にぎって……」

明るい笑い声が過ぎていく。

「……古橋も橋爪も、どっちも二十歳やてなあ」

「ああ、わしらと二つしか違わんで……」

下山総裁とか松川事件とかを口にしながらペダルをこぐグループもある。しかし、道端の小学生など、だれも気にとめないで過ぎていく。岳志は自分が存在していないかのような錯覚をおぼえた。

―　ぼくの知らないところでなにかがおこり、みんなは自分のことにいっしょうけんめいで、この世はぼくを中心にまわっているわけやない。おじいちゃんもお母ちゃんも、ぼくのこと、気にせんと仕事しているやろな。

ちらっと、あほらしい気がした。

金木犀が甘くにおう長い街村をぬけると、急に空が広くなった。黄金色の稲田地帯を直線で二分した道は、やがて二股の分岐点になった。まっすぐに行けばＮ町をへて山口、左手に進めば国鉄駅のあるＫ町に出る。

まっすぐは、女々しい、性根なしの行く道だ。はじめから助けをもとめて逃げだしたと、祖父にとられるのはいやだ。

左は不安だ。もう二度と帰ってくることができないだろう。
岳志は、はじめて後ろを振り返った。
それとわかる三国山が、折からの夕日に薄く山肌をかげらせて、遠く小さく望めた。それは、いつも近くで仰いできた岳志の目に、たいそう頼りなく、薄情そうに映った。
自分は、追い出されたのではない。自分が、嫌だ、とさけんで飛出したのである。あのときの気持ちを思えば、わびてまで戻りたくはない。理不尽な祖父に頭を下げることは、山口に頼る以上に、性根なしの、軽薄者の行為に思えるのである。
— 播磨灘まで下りたいと思うたことがあったな。せやけど、いまのぼくは、澱みの泡や。進むことも戻ることもできへん。
また、こうも思った。
— 『宮本武蔵』には、肝心なことが書かれてへん。武蔵や城太郎は毎日、何を食べて生きとんやろ？　剣や修行やいうても、食べんことには生きてられんはずやで。
岳志は路傍にへたりこんで、空一面に広がっていく残照をみつめた。
— 空は広く、美しい。地上のぼくは点のように小さい。なんでぼくは怒ったんやろ。家を飛出すほどのことやったやろか。
自身に向ける怒りを静めるすべもわからず、岳志は面を伏せた。
「乗れや」
夕闇のなかに、怒ったような声がした。近所に住む従兄の誠人が、自転車のサドルにまたがって見下ろしている。
誠人は中三で、延雄の妹の千代と角屋新治夫婦の長男である。年子の弟、三年生と一年生の妹がいる。岳志は千代を叔母ちゃん、新治を叔父ちゃんとよんでいた。
従兄弟といっても、年齢がはなれているせいで、岳志が角屋の子どもたちと遊ぶことはなかったし、初美が岳志を伴って山口に泊まりに出かけるような親密さで、千代が子どもたちを連れて岳志の家に帰ってきたことはなかった。
そうかといって両家は不仲ではない。なにごとか暗黙の取り決めがあるかのように、節度をもって結ばれていた。
岳志は、だまって荷台に乗っかった。
「おじいちゃんは、村の人に頼んで、山探しをしとってんや」
責めるように、誠人がいった。
「うん」

小声で返して息をすいこんだ。息は、大きなあくびになって出ていった。
無口なふたりに、カタン、カタンと、油の切れたペダルの音がついてきた。

「角屋に行ってこい」
学校から帰った岳志を待ちうけていたように、祖父がいった。行ったらわかる、と用件を明かさない。岳志は庭の富有柿を一つもぎとり、皮をペッペッとはきながら、角屋にむかった。
家出からおよそ一週間がすぎた土曜日である。その間、籾摺りや米の蔵入れや供出、畦に植えていた大豆の取り入れなど、岳志は力惜しみせずに手伝った。祖父は褒めもしなかったが、小言もなかった。
不思議だったのは、家を出たことは父にも伝わっているはずだのに、だれからも叱責されなかったことである。
人は、日々何を食べ、それがどうからだの組織をつくり機能したかを一々記憶していないように、岳志にとって、過去は消化し排泄するものである。牛のことも、家を飛び出したことも、すでに過去のできごとになっている。
ただ、あの日、母が表に待っていて泣きながら抱きしめたのに自分は泣かずに、ごめん、と一言いったことの記憶はぬけないでいる。
村が広く、さびしく感じられるのは、稲木が片付けられたせいだ。切り株に青い茎がのびているのも、冬の近いことを思わせて、少し物悲しい。
角屋は山際の高台にあり、裏庭から岳志の家が遠望できる。岳志は、勝手口に入る裏庭で、何気なく家を振り返った。いつもは迎えてくれるのに、今日にかぎって姿を見なかった母が、こちらをみて佇んでいた。
― なんや。おやつもらわんで、損したな。
そう思ったときには、母はうつむいて、築地のかげに姿を消した。
新治は、まあ上がれ、と岳志を台所の板の間に座らせ、千代を呼び寄せると、
「お前はな、ほんまは、わしらの子や」
微笑んでいった。
― えっ！ わしらの子って、どういうこっちゃ？
日ごろは、角谷の叔父ちゃん、とよんでいる人である。岳志はまじまじと新治の顔をみつめた。口のはたに大きな黒子があるのも嘘っぽい。

「お前は、この家でわしらの子に生まれたんやが、延雄さんとこに子ができんので、どうしてもほしい、といわれてのう。それに、丑年の三男は、上を角で追い出すといわれとったしのう」
笑顔でつづけた。
とほうもなく大事な話が始まっていると思う一方で、悪い夢みとんやろか、笑いながらの話やから冗談やろ、第一こんなことは叔父ちゃんから聞く話やないで、まともに聞いたらあかん、などの否定思考が機能して、岳志はかろうじて冷静を保っている。
新治は相変わらずの笑顔でひとつうなずくと、さらりといった。
「生まれて間なしに、養子に出した」
―― 怖い話を、よくもまあ笑いながらいえるもんや。こんなん、嘘や！
黒子をにらみつけてやった。黒子には、黒い毛が一本伸びていた。そり忘れか、マジナイで残したものかはしらないが、岳志は急に笑いたくなった。
―― 叔母ちゃん。ほんまのところは、どうなん？
怒ったような赤い顔で、下唇を噛んだ千代は、岳志の視線を外してうつむいた。にぎりしめた拳が、ひざの上で震えている。どうやら作り話ではないらしい。
「親戚同士やし、いつかは出て行く子や。ちょっと早いか遅いかの差や思うて養子にやったんやが、お前が近頃どうもしにくうなったんで、この際、よう気持ちを訊いてくれというてきたんや。今のままでくらすか、この家に戻るか、まあ二三日よう考えて、自分で決めたらええ」
時計の針を戻すほどのことや、といわんばかりにいいきった。もう笑ってはいなかった。
千代は、その言葉を待っていたかのように立ち上がると、流し場に立った。
まな板が、音をたてはじめた。音は緩慢で、しばしば止まった。
新治は、キセルをとりだした。もう、岳志とは目をあわそうとはしない。
柱時計の音が、高くなった。その音と競う鼓動を感じた。悲しみはわかなかった。規定以上の電流が流れると自動的に切れるブレーカーのように、心の安全弁が作動したのだろうか。
新治の笑顔と千代の拳の震えを焼き付けて、岳志の感情は停止した。
いがらっぽく、脂くさい煙が流れた。岳志はむせながら、キザミタバコの匂いはお父ちゃんのピースとは違うな、と思った。
いつだったか、あの子はもらい子や、と噂されているのを聞いたことは、ある。

その意味することが分かる年齢だけに、不幸な〝継子〟として、憐憫の目でみられのがいやで、当人に確かめたくはなかった。まして母には訊けなかった。万一、養子であった場合、ガリレオのように、それでもぼくはぼくや、と胸をはるだけの自信がなかったのだろうか。

いや、それほど深刻な思惑がはたらいていたとは思えない。人々が、自分の暮らしが安心安定であるかぎり、自分の住んでいる宇宙が天動であろうと地動であろうと、その真理を知ろうとしないように、自分もぬくぬくと親の愛につつまれて、中傷を糾す必要がなかっただけの話だ。

しかしいま、岳志は、宇宙観の転換をせまられた。天動説か地動説かの選択を避けることはできない。

鼓動が激しく、早くなった。飛出したくなる衝動が突き上げた。

が、それを抑えこむ制御装置が強くはたらいて、岳志は、自分が生きたまま展翅された蜻蛉になったように感じた。

ふと、「山猫令嬢」の、生みの母と娘の愁嘆場が浮かんだ。

—あんな映画は嘘もんや！　涙を流すなんてアホや！

怒りの感情が、岳志の自尊心を回復させた。

—なんや！　やったとか戻すとか。ぼくは、犬や猫とちがうで！　丑年の三男かて、ほかの家にもおるやろが！

岳志はグイと顔をもちあげた。

突然、障子をへだてて人の動きがあった。ぼそぼそとささやく幼い声に、

「もうええやろ」

許可を与える誠人の大人びた声がして、幼い女児の、明るい声がはじけた。

夕餉がはじまった。飯台は、囲炉裏を覆った箱である。千代は飯櫃の横で箱膳で食べたが、新治と子ども五人が座るには窮屈だ。子どもたちは、肘をぶつけあいながら、いそがしく茶碗を行き交いさせ、喋り、笑った。

岳志の家では食事中のおしゃべりは禁じられ、早食いをしたり、偏って箸を出すと叱られた。きちんと正座して黙って食べ、大人たちの会話に岳志が口をだすことは許されない。

「遠慮せんと食べえ」

新治がふたたびの笑顔でいった。それは、箸のおそい岳志への励ましというよりも、本意なく戻されて場になじめずにいる三男に、生みの父親がその日はじめてみせた愛情表現

であったろう。
しかし、岳志には他人行儀な言葉に聞こえた。自分はあくまで客として扱われているという思いがこみ上げるのであった。
食後の居間。子どもたちは、他愛のないことで怒り、泣き、笑いあう。四人の輪に入れず、岳志は裏庭に出た。虫の音が止んだ。
薄く墨を刷いたような月明かりのなかに青白く映える大屋根を見つめた。
ふたたびもどった虫たちの合唱につつまれて、その屋根の下の厳しい父と、気落ちしているにちがいない母を想った。

一番鶏が鳴いた。
明かり障子の、ほの暗い光で布団をたたむ。
忍び足で台所にむかう。まな板の音がする。
千代と目があった。
「早いやないの。日曜やし、もっとゆっくり寝とったら」
— 褒めているような、引き止めているような、どっちねんやろ？　でも、やさしい顔や。
「帰るわ」
せいいっぱい、明るくいった。

一面の朝霧。睫毛がぬれて重いのは、多分、そのせいだ。受け口になって、ふきとばした。
— ぼくは、自分の意思で、家に戻っていく。加古川の流れのように、後戻りはしない。そして、ぼくは、ぼくの高砂にたどりつく。
睫毛を吹いた唇は笛にかわっていた。
霧海のなかに軒明かりが見える。いつもは点いていないはずの、そのおぼろな光に、岳志は親の心を感じとった。

プロフィール

足立剛（あだちつよし）

一九三七年　兵庫県生まれ。
一九六〇年　明治大学文学部卒業。兵庫県公立中学校教諭、教頭、幼小中校園長。
一九九八年　退職。市教委嘱託指導主事。法人保育所理事長など。
文筆　○ 第二回「文芸思潮」エッセイ賞に「江戸風鈴」当選。
　○「〈生きる力〉の泉─心をはぐくむ　十六の話」近代文芸社。
　○『月刊プリンシパル』（学事出版）に「ビジュアル教育講話学」を連載。
　○「感動を呼ぶ入学・卒業式辞集」学事出版。他。